

社会科学古典資料センター長に就任して

川 井 健

昭和59年9月、私は、一橋大学社会科学古典資料センター長に就任しました。このセンターには、世界でも誇るべきメンガー文庫、ギールケ文庫、左右田文庫、バート・フランクリン文庫および一般貴重書が所蔵されており、センターは、まさに社会科学研究のメッカともいうべき役割を果たすべきものとされています。

このうち、ギールケについては、私の学生時代、彼の名著「ドイツ団体法論」中の名文句「人の人たるゆえんは、人と人との結合にあり」に接して以来、ドイツ語の勉強を兼ねてこの書物にとりくんだ思い出があります。その後ドイツに留学して、1958年の冬学期、ゲッチンゲン大学で、オットー・フォン・ギールケの子のユーリウス・フォン・ギールケ教授の商法の講義に接しました。ユーリウス教授は、すでに80歳位の老齢でしたが、堂々たる体格の方でした。このユーリウス教授も、すでに亡くなられましたが、西ドイツのフライブルグ大学の法制史家クレッシェル教授が、オットー教授の孫の家から、オットー教授の遺稿を発見したそうです。それは団体法論の一環としての家族の問題を扱ったものであり、クレッシェル教授は、近くこれを整理して出版されると聞いています。クレッシェル教授は、このセンターを訪れてギールケの蔵書の中に、ギールケ自身がどのような書き込みをしているかを調べてみたいと話していました。おそらく、1983年の来日のときに、教授は、その目的を果たしたものだと思います。最近、北海道大学の五十嵐清教授からいただいた私信によると、昨年五十嵐教授は、リュネブルクに住むオットー・フォン・ギールケ教授の孫アイケ・フォン・ギールケを訪問したそうです。そのとき、このお孫さんは、そのうち是非一橋大学のギールケ文庫を見たいと話していたということでした。そのうち、これが実現できるならば、センターにとってもよろこばしいことだと思います。

昨年センターを訪れた大ぜいの外国の学者からは、いまやヨーロッパでよりも、このセンターで勉強したほうが、すぐれた成果をあげられるというお世辞を聞いたほどです。このような立派なセンターは、社会科学古典資料を専門とされる代々のセンター所属教授および職員の努力によって発展してきました。初代の細谷新治教授について、2代目の杉山忠平教授は、3年間にわたりセンターのために貢献してこられました。昭和59年春、停年で退官されました。この機会を借りて、杉山教授の御功績に厚く御礼を申し上げます。

現在は、田中正司教授の下でセンターは発展を続けていますが、いかんせん、施設や予算の面での制約があり、文字通り本来のセンターとしての役割を十分果たすところまでにはいたっていません。学内外の方々の御協力により、センターが日本、ひいては世界の社会科学古典資料センターとしての重要な機能を十分に果たせることを期待するものであります。

(一橋大学社会科学古典資料センター長・法学部教授)